

明代軍政・辺防書の研究・序説

川勝, 守

<https://doi.org/10.15017/1904661>

出版情報 : 史淵. 133, pp. 53-82, 1996-02-29. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

明代軍政・辺防書の研究・序説

川 勝 守

はじめに

中国大陸からインドシナ半島・マレー半島を西とし、朝鮮・日本九州・奄美西南諸島・琉球・台湾・フィリピン・カリマンタン・ジャワ島を東とする海域は古来、中国人、インド人、アラビア人をはじめ、日本人・琉球人、朝鮮人、マレー人等の海上交通・海上交易が盛んな地域であつた。近千年、中国人の海外移住が開始され、日本の九州博多に宋商謝国明等百余家の居住地が形成された。東南アジアのジャワにも中国人居住区が出来た。一五世紀初、宦官鄭和の南海遠征は、その最初の契機が東南アジアの中国人の紛争の解決や捜査活動を目的にしていたと考えられる。近六百年前の一四世紀、九州瀬戸内の武士土豪・商人・漁民らが朝鮮半島から中国大陸に至って交易活動や海賊行為を行なつた。いわゆる倭寇である。元末の反乱から身を起し、群雄を平定して明王朝を建国した太祖朱元璋は倭寇対策として沿海住民の「片板一枚の渡海も厳禁」の海禁政策をとつた。朝鮮も倭寇討伐に功績のあつた李成桂が李王朝を開いたので明と同様の政策をとつた。しかし、両国とも海禁政策で対策は十分と考えておらず、はじめは太宰府征西将

軍懷良親王、ついで室町幕府將軍に外交交渉を行い、政治的に解決しようとした。三代將軍足利義満は南北朝統一の後、明に使者を派遣し、明から日本国の王に冊封され、倭寇取締がその義務とされた。日明間の貿易は勘合符により正式か否かが判別されて倭寇は排除された。いわゆる日明勘合貿易である。これにより一五世紀には倭寇は一時終息をみた。^①

日明の国家間の安定的関係は一五〇年続いたが、一六世紀中葉に再び倭寇活動が活発となり、明嘉靖二十九年、日本の天文十九年（一五五〇）遣明正使策彦周良の帰国をもって日明国王通交の時代は終わった。ただし、この時期の倭寇、後期倭寇とか嘉靖倭寇と呼ぶがその特徴として「真倭は十に一」といわれ、その実は王直・徐海等の中国人商人、密貿易業者によるものであり、しかも、当時生糸絹織物、木綿織物等の商品生産の発展を踏まえて土地集積から高利貸し活動まで地域経済を掌握し、社会的地位を確立した江蘇・浙江・福建の郷紳層が密貿易業者・倭寇の背景にあった。嘉靖二十六年に浙江巡撫になり、海禁の厳守と倭寇取締に全力をあげた朱紉も郷紳との妥協を排したため、かれらの反対にあつて職半ばで辞任した。従つて、倭寇問題は明王朝政府にすれば対外戦争ではなく、国内治安問題であつた。しかし、それでもいわゆる海防問題は重視され、また、倭寇取締に当る兵士の軍制度の再編や軍事政策の練直しが要請された。ここに明代軍政・海防書の作成がある。ところで、一四世紀倭寇に関しては、故長沼賢海教授が収集された五島青方文書のごとき史料が知られるが、一六世紀倭寇の日本側史料は少ない。中国側史料が重要であるが、従来は明実録が中心でそれに『籌海図編』『日本一鑑』などが利用されてきただけで明代軍政・海防書の利用は不十分であつた。まずはその存在から確認しよう。

「一」明代軍政・辺防書の所在目録

江戸時代における漢籍蒐集を最も多く行つたのは徳川幕府である。その蒐集した漢籍は江戸城内紅葉山の書物庫に

収蔵された。紅葉山文庫ないし楓山文庫と呼ぶ。その収蔵漢籍は現在、国立公文書館内閣文庫及び宮内庁書陵部に継承されている。明代軍政・辺防書の所在について、まず両機関から検討しよう。なお、以下の凡例であるが、機関名にABCを付け、次に軍政書をI、辺防海防書をII、その他をIII・IVと分類することとする。

AI。昭和三年初刊、四五年新訂『内閣文庫漢籍分類』史一四政書(四)軍政には、

1 皇明兵制考(采歴史著録本) 三卷明史繼偕撰明刊

2 全浙兵制考三卷日本風土記五卷明侯継高撰明刊

3 同(林鷲峯手跋本) 延宝五写

4 軍制条例七卷明譚綸等撰 明万曆二刊

4 軍政条例七巻が楓本、すなわち徳川幕府將軍の御文庫たる江戸城内の紅葉山文庫所蔵本の他、1、2は九州

豊後佐伯侯毛利高標蒐集幕府献上本であり、3は明清交替時に長崎で収集した海外情報資料『華夷変態』編纂に当った林鷲峰恕の手跋本というように、いずれも内閣文庫所蔵の珍本であり近世前半の日中文化交流を示す重要資料である漢籍、軍政書である。

II。次に、同文庫漢籍目録の史一一地理類(六)辺防には、

1 籌海図編一三卷明鄭若曾撰明嘉靖四一序刊山本北山旧蔵

2 同 一三卷明鄭若曾撰明隆慶六序刊

3 同 一三卷明鄭若曾撰胡宗憲編 明刊(清印)

4 九辺図説 明孫応元撰 明隆慶三序刊

5 新刻九辺破虜方略五巻 明栗在庭等撰 明万曆一五序刊

6 江防考七巻附二巻 明呉時來撰 明万曆五序刊

昌一九冊 二九一・八四

楓八冊 史一九八・一一

八冊 二九一・九四

楓二冊 史一九八・九

楓五冊 史一九八・八

楓一二冊 史一九八・七

7 両浙海防類考続編一〇卷 明范涑撰 明万曆三〇序刊

8 海防纂要二三卷 明王在晋撰 明万曆四一序刊

9 輿地図考二卷海防備考九辺備考九辺地図考各一卷 明刊

10 全辺略記一二卷 明方孔 撰 明崇禎元序刊

11 五辺典則二四卷 明徐日久 明崇禎三序刊

1 籌海図編は従来の諸研究に多く使用された史料で、史料紹介や資料解題が成されている。²⁾ 同書は嘉靖四一年(二五六二)以来、明末までに数版を重ねたが、その最も早い版で昌平坂学問所本、すなわち江戸近世の世襲儒官であり、幕府外交当局ともいうべき林大学頭家蔵本である。なお、同内閣文庫には2の隆慶六年序刊本と3の明末刊清初印本とがある。前者は紅葉山文庫本である。なお、籌海図編はいずれも撰者は鄭若曾とされており、3のみその編者に胡宗憲の名が見える。7、8は尊経閣文庫等にも所蔵する明代海防書の重要書籍である。

III。次に、同文庫漢籍目録の史五雑史類には、

1 名臣寧攘要編 明項德楨編 明万曆刊

毛五冊 史 四七・四

第一冊 西征石城記・明馬文升 東夷記・明馬文升

興復哈密記・明馬文升

北虜事跡・明王瓊 西

番事跡・明王瓊

第二冊 西夷事跡・明王瓊 龍憑紀略・明田汝成

藤峽紀聞・明田汝成

第三冊 大寧考・明楊守謙 大同平叛志・明尹畊

藤峽紀略・明尹畊

南太紀略・明尹畊 款塞始

末・明劉応箕 伏戎紀事・明高拱 雲中降虜伝・明劉紹恤

第四冊 西南紀事・明郭応聘 撫夷紀略・明鄭洛

第五冊 夷俗記・明肅大亨 再征南記事・明李士達

西南三征記・明郭子章

征南紀事・明周光鎬 平

番紀事・明劉伯燮 綏交記・明楊寅秋 紀勦・明茅坤 征西紀事・明謝詔

2 毛大將軍海上情形 明汪汝淳撰 江戸初写 江一冊 別 四二・九

3 幸存録 五巻統二巻 明夏允彝撰 江戸写 昌一冊 二八六・一九七

4 万曆三大征考 啤氏一卷倭二巻播州一卷 附東夷考略三巻 楓二冊 史 四八・六

東事答問一卷附圖 明茅瑞徵撰 明天啓元序刊

5 同 四巻附圖 明茅瑞徵撰 江戸写 林一冊 二八六・一七八

6 同 存倭二巻 明茅瑞徵撰 文政四写(高橋景保旧蔵) 一冊 二八六・一七七

1 が豊後佐伯侯毛利高標旧蔵の献上本、2 が林羅山蔵本、3 が昌平坂學問所本、4 が紅葉山御文庫本、5 が林大學頭本、6 が彼の高野長英等とともにシーボルト事件に連座した幕府書物方奉行の高橋景保旧蔵といった旧蔵者が注目されよう。

次に、宮内庁書陵部にも明治時代に内閣文庫本から別置した貴重漢籍がある。

B II。『宮内庁圖書寮漢籍善本書目』(昭和五年) 史部地理類に

1 海防纂要十三巻 明万曆癸丑高挙序及自序 万曆刊本 一〇冊 二二七・六七

2 三鎮圖説一卷 明楊時寧・白希繡等編 万曆三一年鈔本 一冊

1 には各首冊に「徳藩蔵書」の印がある。すなわち徳山毛利家の幕府への献本である。A I から 本書は林家の所蔵はあったが、紅葉山文庫になかったことが分る。

III。同書目の史部伝記類に、

1 使琉球録二巻 一冊 五〇六・一二七

「王繩」「天爵堂圖書記」「君美」の蔵書印があり、新井白石蔵本と判る。

幕府関係漢籍に次ぐ多数の蒐集は外様最大の加賀前田家である。その蔵書は前田育徳会尊経閣文庫に所蔵されている。

CI。『尊経閣文庫漢籍分類目録』（昭和九年）史部職官政書法家諸書類一に、

1 軍政条例類考 六卷明史某撰 明嘉靖版

六冊 二二九頁

次に、同漢籍目録、子部宋元明清百家類五、兵家之属に紀効新書や武備志に並び、

2 全浙兵制 日本風土記 兵制第一卷闕 明侯繼国撰 明版

一二冊 四〇七頁

内閣文庫毛利高標献上本『全浙兵制考』と同版である。ただし、一卷が欠ける。

II。同漢籍目録、史部地理類一には府県志等の地方志に混じり、

1 方輿勝略外夷 六卷明唐時升等撰明万曆版本

四冊 二〇六頁

2 兩浙海防類考 四卷明謝廷傑撰明万曆版

四冊 二〇九頁

3 兩浙海防類考統編 一〇卷明范涑明万曆版

九冊 二〇六頁

4 海防纂要 一三卷明王在晋撰明万曆版

六冊 二〇六頁

5 籌海図編 一三卷明胡宗憲撰明天啓版

一三冊 二〇八頁

6 東夷図説 嶺海異聞 嶺海統聞 明蔡汝賢撰明万曆版

三冊 二〇九頁

7 温処海防図略 二卷 明蔡逢時撰明万曆版

二冊 二一〇頁

8 彙輯輿図備攷全書 一八卷 明潘光祖撰 清順治刊

一二冊 二二二頁

明代辺防海防書の全体が完全に揃っている。特に2 兩浙海防類考四卷、3 兩浙海防類考統編一〇卷、4 海防纂

要一三卷、7 温処海防図略二卷は善本である。ただし、5 籌海図編が天啓版であって、内閣文庫幕府関係所蔵本

に較べて版が新しいのが注目されよう。なお、内閣文庫は2 兩浙海防類考と7 温処海防類考は架蔵しない。

III. 次に同漢籍目録の史部雜史類一には、

1 万曆三大征考 東夷考略 明茅瑞徵撰 明天啓版
2 全辺略記 一二卷明方孔炤撰 明崇禎版

3 皇明辺政紀略 一八卷明鄭延祚撰 明天啓版

IV. 次に、同漢籍目録の史部地理二には、

1 九辺図記 明馬一龍撰 玉華子游藝集秘書館卷一四本

2 輿図摘要 一五卷 明李日華撰 四六全書本

3 宝顔堂訂正四夷考 八卷 明葉向高撰

4 東夷考略 明茅瑞徵撰 万曆三大征考後附本

5 九辺図論 明許論撰 兵垣四編附編本

6 海防図論 明胡宗憲撰 兵垣四編附編本

7 日本考略 明殷都撰 兵垣四編附編本

8 新編大明一統九辺險要韜略世法 明徐光啓撰武芸大全新編韜略世法本

9 新刻硃批武備全書海防総論 明周弘祖撰 皇明將略後附本

10 閉戸周疆 明喻龍德撰 喻子十三種秘書兵衡卷之八本

11 武庫九辺考 明張一龍撰 武庫纂略後附本

12 輿地図考 四卷 明程道生撰 兵鈴七種本

13 新編大明一統地利險要韜略世法 明陳廷対撰 武書大全新旧韜略世法本

14 日本風土記 五卷 明侯繼国撰 全浙兵制後附本

四冊 一七四頁

一五冊 一七四頁

八冊 一七四頁

一冊 二一九頁

三冊 二二〇頁

二冊 二二一頁

二冊 二二一頁

一冊 二二一頁

一冊 二二一頁

一冊 二二一頁

一冊 二二一頁

一冊 二二二頁

一冊 二二二頁

一冊 二二二頁

四冊 二二二頁

二冊 二二二頁

五冊 二二二頁

伝本系統に不明な点があるも、近世江戸時代以来の漢籍を持つ国会図書館を見よう。

D II。『国立国会図書館漢籍目録』（昭和六二年）史部、辺防之部（二三五頁右）に、

1 鄭開陽雜著 11 卷 明鄭若曾撰 民国二二景印南京図書館本

四冊

2 籌海図編 13 卷 明胡宗憲撰 天啓四序胡維極刊

八冊

3 全辺略記 12 卷 明方孔炤撰 民国一九北京

六冊

4 五辺典則 24 卷 明徐日久撰 崇禎三序刊

二四冊

近世伝本はわずかに二本、それでも籌海図編は所蔵されている。なお、同図書館所蔵の軍政関係書は清書だけで明書はない。

以上 A 内閣文庫、C 尊経閣文庫の所蔵する明代軍政辺防関係書の内容をみてきたが、両文庫すなわち徳川幕府関係機関と加賀前田家との当該書籍の所蔵傾向に極めて強い類似性が認められよう。それに対してその他諸家蔵本は寥々たる存在である。

尾張名古屋徳川家の蔵本は徳川家康の旧蔵本をその遺言によつて藩祖義直に譲った駿河御譲り本を中心とし、それに義直以下の藩主が購入した書物を以て蓬左文庫と名付けた。

E II。『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』（昭和五〇年）史十一地理類には、（四七頁）

1 大明九辺万国人跡路程全図一幅 清康熙二年姑蘇王君甫発行紙本彩絵

六二・九七

同漢籍目録 史十三政類には、（五〇頁）

2 海防纂要 一三卷 六冊 明王在晋撰 万曆四一序刊本

一五八・三四

海防纂要がめぼしいが独自の漢籍はない。この傾向は紀州徳川南葵文庫、山口毛利氏や熊本細川氏永青文庫、鹿兒島島津氏玉里文庫、平戸松浦氏等蔵書も同様である。

近世大名以外で注目されるのは大坂懷徳堂である。

F I。大阪大学文学部『懷徳堂文庫図書目録』（昭和五十一年）史部政書類、軍政之属に、

1 軍機故事三卷附補遺一卷 清姚文棟撰 清刊本

一冊 六二頁

II。同図書目録、史部地理類边防に、

1 籌海図編十三卷 明胡宗憲撰曾孫維極重校刊本

八冊 五九頁

I。1 軍機故事は珍本である。内容は明代もある。II。1 は最も流布本の天啓版。

近代蒐集の各図書館では、三菱・岩崎蒐集の静嘉堂文庫、東洋文庫を見てみよう。

G II。『静嘉堂文庫漢籍分類目録』（昭和四年）史一一地理類（五）边防に、

1 籌海図編 一三卷 明胡宗憲編 明嘉靖刊

八冊 一〇・一

2 同 一三卷 明胡宗憲編 明天啓刊

八冊 四五・一七

3 鄭開陽雜著 一一卷 明鄭若曾撰 清康熙三六刊

四冊 一〇・四

4 修攘通考 六卷 明何鐘編 明万曆刊

六冊 一〇・四

5 边防議 二卷 明陸完字撰 写

一冊 一〇・六〇

ここの籌海図編は初版嘉靖版である。4 修攘通考六巻と5 边防議二巻は他に見られない独自の漢籍である。

II。同漢籍目録 史一一地理類（一一）地図に、

6 大明九辺全図（康熙二年刊）一折

一 七七・九一

これは名古屋蓬左文庫の大明九辺万国人跡路程全図と同じものである。

H I I。『東洋文庫所蔵漢籍分類目録・史部』（昭和六一年）第十五政書、五軍政には、

1 馬政史四巻 明陳講撰 嘉靖二十九年序刊本

二冊 XI 3 A b 2 9

- 2 海防図論一卷 明胡宗憲撰 明吳興世德堂刊本 一冊 XI 3 A b 1 9 8
- 3 兩浙海防類考統編十卷 明范涑撰 明万曆三十年刊本 藤一〇冊 XI 3 A b 2 1 1
- 4 海防纂要十三卷 明王在晋撰 明万曆四十一年序刊本 一二冊 XI 3 A b 1 9 1
- 5 万里海防図論二卷日本図纂一卷明鄭若曾撰清康熙三十重刊本 六冊 II 1 5 D 5 3
- 6 明代禦倭軍制一卷 明李遂撰 石印用天一閣藏明版 一冊 II 1 5 D 5 6
- 2、3、4は内閣・尊経閣両文庫に所在するが、辺防海防書。1、5、6は新出。

II。同漢籍目録・史部の第十一地理類七辺防には、

- 1 鄭開陽雜著十一卷 明鄭若曾撰 景印南京図書館蔵鈔本 四冊 II 1 1 H 1 5
- 2 皇明九辺考十卷 明魏煥撰 明嘉靖二三夔州知府張環刊本 四冊 XI 3 A b 1 1 1
- 3 九辺図論一卷 明許論撰 一冊 XI 3 A b 1 9 8
- 4 籌海図編十三卷 明胡宗憲撰 明天啓四新安會孫維極重刊本 八冊 XI 3 A b 1 9 2
- 5 全辺略記十二卷 明方孔炤撰 明崇禎元桐城方氏原刊本 二〇冊 XI 3 A b 1 3 4
- 6 三関図説不分卷 明康丕揚等撰 明万曆三五刊本 四冊 XI 3 A b 5 1
- 7 兩浙海防類考統編十卷 明范涑撰 明万曆三十年刊本 藤一〇冊 XI 3 A b 2 1 1
- 8 温処海防図略二卷 明蔡逢時撰 景照旧北平図書館本 二冊 II 1 1 H 4 2
- 9 籌辺一得不分卷 明易文撰 明嘉靖二六鈔本 一冊 II 1 1 H 3 7

9が他に見られぬ漢籍である。7は前掲I。の重掲載。東洋文庫の図書番号の頭XIは貴重書、この場合明版であるが、その由来は近代の蔵書家が国内で購入蒐集したものであり、その日本将来は江戸近世に遡ると思われる。

大学附属図書館等は東京大学附属図書館、同東洋文化研究所、京都大学附属図書館、同人文科学研究所等が多数の

漢籍を所蔵するが、それらにはめぼしい軍政海防書はない。

それでも東大東洋文化研究所大木文庫、京大人文研究所等には天啓四年序刊本の籌海図編が所蔵されている。一例を東北大学狩野文庫の漢籍に見てみよう。

I II。『東北大学所蔵古典分類目録漢籍 経史部』（昭和四九年）史部第一一地理類、六边防に以下の通りだが、狩は狩野文庫。

1 鄭開陽雜著一一卷 明鄭若曾撰 民国二十一年景印本

四冊

2 籌海図編一三卷 明胡宗憲撰茅坤等訂 清刊本

八冊 狩

3 全辺略記一二卷 明方孔炤撰 民国十九年排印本

六冊

各大学の傾向を代表している。

〔二〕明代軍政・海防書の日本将来の時期

以上から解る通り、明代軍政・海防書はその重要なものはほとんど内閣・尊経閣両文庫に所蔵されている。ここで問題となるのは上掲の如き軍政海防書が両文庫にいつ入ったかであるが、大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』一九六七、関西大学東西学術研究所、に収録された『商船載来書目』正徳四く文化二によるかぎり、A I。4 軍政条例七卷四冊・楓が元禄七甲戌年に「一、軍改条例 一部八本」とあり、また、A II。1 籌海図編一三卷九冊・昌、B I。5 籌海図編一三卷一三冊とある同書は享保九甲辰年に「一籌海図編 一部一套」とある。これに対して、享保年間から元文年まで將軍吉宗が御用にした漢籍の記録を『幕府書物方日記』で確認すると、軍政条例四冊は享保六年二月二十三日に、籌海図編八冊は享保十年四月五日に御用になっていることが判る。また、A II。7 輿地図考一冊は享保十七年閏五月二十七日の御用が確認される。しかし、この時点で全浙兵制考、兩浙海防類考、同統編、海防

纂要、温処海防図略等の主要軍政・海防書の將軍御用は見られない。というよりは吉宗の時代、享保の頃の江戸城中紅葉山御文庫にはそれ等書籍は所蔵していない点が確認される。A II。1 籌海図編一三巻が山本北山旧蔵を経て昌平坂学問所にあり、5 両浙海防類考続編一〇巻また同昌平坂本、6 海防纂要一三巻も林大学頭家の所蔵であった。これら書籍が江戸時代の外交当局とも言うべき林大学頭家に所在することの意味をむしろ重視すべきであろう。その点に係わって、A I。2 全浙兵制考は写本ながら、毛利高標本(同A I。1)が幕府に献上される前には、林鷲峯手跋本と言われて珍重されたことは重要である。

従来倭寇研究にしても、環東シナ海地域間交流史研究にしても、籌海図編を史料とすることが多かった。それは近世期に同書が多数伝来したことが一つの理由であった。近世長崎貿易により唐人から購入した漢籍目録である『書籍元帳』(長崎県立図書館所蔵)によれば、弘化二歳己五月に辰(弘化元年一八四四)四番五番六番七番船并辰歳新渡の書籍の中に「百十四籌海図編 六部内 五部各一套 一部四套舐入」とあり、同じく弘化四年歳未正月の元帳に午(弘化三)壹番式番参番船の新渡本の中に「一籌海図編 〇一部一套」とあり、弘化四歳未八月午四番五番六番七番未壹番持渡の元帳に「一籌海図編 〇一部二套」とある。また、長崎で書籍取引の実際を示す『落札帳』(九州大学九州文化研究所施設所蔵)弘化二年己(一八四五)式番割に

一籌海図編

六部

三十匁六分

鉄屋

二十七匁

安田や

二十六匁

菱や

とあり、鉄屋が三十匁六分で落札している。同年落札価格の比較をすれば、綏寇紀略一部壹套六本を同じ鉄屋が二十六匁で落札し、漢魏叢書壹部式包八本を鉄屋が三十匁七分、太平広記壹部六套八本が四十五匁六分でやはり鉄屋が落

札している。値の高いものでは五編通鑑卷部八包六本八本各を卷貫三十四匁で長ヲカが落札、佩文韻府卷部貳拾套を卷貫七百十匁で長ヲカ、皇朝經世文編は安田やが三百二十匁、知不足齋叢書を鉄屋が三百四十五匁で落札、以上から籌海図編の価格の位置が判らう。これが同じく『落札帳』安政六年（一八五九）六月二十五日六日荷見セ於会所未（安政六年）参番船に、

一 籌海図編 二部

五十三匁五分 本屋

三十二匁九分 鳴屋

二十六匁九分 書物屋

とあるが、先の弘化二年から十五年後、書籍価格はやや値上がりしているかもしれない。しかし、こうした『落札帳』などにも『海防纂要』以下の海防書の名は見られない。

〔三〕 主要軍政・海防書の内容項目

四庫分類の史部政書類軍政に属す漢籍と同じく史部地理類边防に属す海防書との分類定義は難解であるが、現在内閣文庫所蔵の毛利高標献上本『全浙兵制考三卷日本風土記五卷』明侯継高撰、明刊、五冊の内容項目を検討する中で軍政書の定義も併せて考えてみよう。

第一卷 全浙海図 全浙海図総説 全浙水陸兵制并沿海地理烽墩考

杭嘉湖区図 杭嘉湖区図説 杭嘉湖兵制 衛所烽墩 本区倭乱紀

寧紹区図 寧紹区図説 寧紹兵制 衛所烽墩 本区倭乱紀

第二卷 台金嚴区図 台金嚴区図説 台金嚴兵制 衛所烽墩 本区倭乱紀

温処区図 温処区図説 温処兵制 衛所烽墩 本区倭乱紀

附録近報倭警

第三卷 造修福船略説 附纂造新修旧大小福島船料数

附日本風土記目錄

第一卷 日本国図

倭国事略

畿内部

駅

戸

課

島名

寄語島名

倭船

倭好

寇術

倭刀

第二卷

沿革

疆域

畿州郡島

国王建都

属国

山川

土産

国王世伝

所属戸口

朝貢

貢物

貢船開泊

君臣礼節

説官分職

染牙

内俗

徵糧

法度

官出巡

風俗男子婦人

婚姻

便宜婚姻

生育

喪事

祭祀

貿易

時令

待賓飲饌

出海通番

商船所聚

居室

公文

三教

九流

百工器械

娼優隸卒

第三卷

字書

以路法字様

歌謡

岩衣山帯

松風攪睡

秋田曉露

鹿悲紅葉

冬花春発

年内立春

新歲挙筆

春雲引志

難中春怨

春風過嶺

億摘櫻桃

摘花遇雨

樵子偷桃

春野採花

雲迷夏月

第四卷

松影罩山	指月候人	雲山苔石	皓月逢人	月下鴈婦
玉霜問婦	世笑梅豈犬	倩人摘梅	日月同天	蜒蜥避牛
心命相連	托月譬病	婦遲嘆世	夜月感懷	相期不候
夜約誤期	扱善相交	浪裏行舟	京鄉弁智	漁舟速釣
世別清渾	武藏無山	暴雨譬瘡	淚筆写情	
語音	天文	時令	寒温	曉夜
月分	日数	今明	五行	十干
十二支	甲子	地里	火炭	宮室
城市	国部	方向	人物	君臣
吏從	軍民	教流	工藝	流賤
薦糜	親属	称答	身体	衣服
舖蓋	段布	顔色	五穀	飲食
炊煮	数目	算法	器用	内器
農具	船具	馬具	文器	武器
響器	香料	医用	珍宝	花木
菓子	菜蔬	野草	鳥獸	人事

第五卷

文辞

東大寺大朝法齊大師齋然啓

戒嚴王思行成表

詩賦 詠西湖 又詠西湖 春日感懷 奉辺將 答風俗問

普福迷失染清被獲感懷 題春雪 萍 保叔塔

被張太守禁舟中嘆懷 遊育王 四友亭 題花鳥画

鳩鵲争鳴

山歌 日春清水寺 夫婦妻接 月夜私情 少女別郎 青春嘆世

美女憶郎 雜唱小曲 夜憶故交 祝延聖寿 女嘆配遲

琴法 琴樣

琴譜 億中華調 又廻文詞

碁格 象碁 碁子造法 碁子歩法 碁盤式様 困碁

雙陸 征行所禁 纂法 捷法

『全浙兵制考』三卷は明末万曆中に編纂刊行された倭寇対策のための軍政書の一つで、既に中国に伝を失つたいわゆる佚存書である。これに附す「日本風土記」は一六世紀中国人の日本の歴史・地理・風俗・制度・日本語等の理解を示したものであるばかりでなく、中世日本の我が国の実情、特に国語の発音を知るのに有用であるといわれ、この面の写本がかなり流布し、例えば東洋文庫に江戸の木村正辞自筆本がある。なお、昭和三十三年には京都大学文学部国語国文学研究室から国語資料として複写本が刊行されている。「日本風土記」の部分は明らかに倭寇を行う国としての日本の歴史、地理、風俗、言語等の日本情報を収集したものである。これは内閣文庫や東洋文庫の漢籍目録が写本『日本風土記』を地理外紀に分類したのも、この部分が軍政海防書でないことは明白とされよう。

—それでは『全浙兵制考』三巻の性格はいかがであらうか。第一巻の最初に全浙江の海図及びその解説を行い、それに関係する水陸の兵制体制や烽火台の設置状況を解説する。それに続いて、巻一に杭州・嘉興・湖州三府及び寧波・

紹興兩府、卷二に台州・金華・嚴州三府と温州・処州兩府の各分道毎にそれぞれの区図、その説明、その兵制、衛所烽火台体制、それと当該区域における倭寇の活動記録、それらが叙述されている。軍制度や兵制についての書には違いないが、次の『籌海図編』などの海防書との厳密な区別基準を見いだすのは困難であろう。

前述のごとく本書は豊後佐伯侯毛利高標蒐集本でその孫の高翰が文政十一年（一八二八）幕府に献上した善本漢籍の一である。ただし、同書がいつ日本に伝来したかは不明であるが、元禄あるいは寛永期を遡ることは確実である。それは以下の数種の海防書にも共通して言えることである。一つは長崎での漢籍取引文書に、また一つに彼の元禄期以後、將軍の漢籍御用の記録『幕府書物方日記』にその書名が見えないからである。

次に、明代辺防海防書の代表格の鄭若曾撰『籌海図編』一三巻の内容構成をみよう。（ ）内数は冊葉数。

卷一 輿地全図（1） 広東沿海山沙図（10） 福建沿海山沙図（9）

浙江沿海山沙図（21） 直隸沿海山沙図（8） 山東沿海山沙図（18）

遼東沿海山沙図（5） 附図・日本島夷入寇之図（1）

卷二 王官使倭事略

魏（齊王芳）正始元年、六、八年

隋煬帝大業三年

唐太宗貞觀五年

元世祖至元三、四、五、六、一〇、一一、一二、一七、一八、二〇、大徳三年

国朝明太祖高皇帝洪武二年、五年

成祖文皇帝永楽九年、一五年

宣宗章皇帝宣徳八年

今上皇帝嘉靖三四年七月

太倉使往日本針路 身渡海方程及海道針經

倭奴朝貢事略

漢武帝建武中 光武帝中光六年 安帝永初元年

魏(明帝)景初二年 (齊王芳)正始四年 八年

晋(武帝)泰始初年 安帝時 文帝元嘉二年 二〇年 二八年 順帝昇明二年

隋文帝開皇二年 煬帝大業二年 三年

唐太宗貞觀五年 (高宗)永徽初年 二年 咸亨元年

(周武則天)長安元年

(唐玄宗)開元初年 四年 二四年 天寶一二年 (代宗)大曆一二年

(德宗)建中元年 貞元四年 貞元末年 (憲宗)元和元年

(武宗)會昌元年 (僖宗)光啓元年

後梁(末帝)龍德中

宋(太宗)雍熙元年 端拱元年 (真宗)咸平五年 景德元年

(仁宗)天聖四年 (神宗)熙寧五年 元豐元年

南宋(孝宗)乾道元年 淳熙二年

元(世祖)至元八年 九年 一四年

大明(太祖)洪武二年 一二年 一三年 一四年 一五年 一六年

(成祖)永樂二年 (宣宗)宣德元年 七年 一〇年

(英宗) 正統七年 天順二年

(憲宗) 成化二年 一一年 二〇年 (孝宗) 弘治八年

(武宗) 正德四年 八年

(世宗) 嘉靖二年 一七年 二三年 二六年

日本国図 (2)

倭国事略

畿内部

州五 山城・太河・河内・和泉・摂津

畿外部

道七 東海道

十四州

伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・

安房・上総・常陸 (一一六郡)

西海道

九州 筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩 (九三郡)

南海道

五州 紀伊・淡路・阿波・伊予・土佐 (四八郡)

北陸道

七州 若狹・越前・越中・越後・加賀・能登・佐渡 (三〇郡)

東山道

八州 近江・美濃・飛驒・信濃・上野・下野・陸奥・出羽 (一一二郡)

山陽道

八州 播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門 (六九郡)

山陰道

八州 丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・隱岐 (五二郡)

海曲部 島三 伊岐 对馬 多芸

凡四百十四 戸可七万余 課約八十八万三千三百二十九

寄語島名 (六十六国・十五島)

寄語雜類

天文類 (11) 時令類 (17) 地理類 (9) 方向類 (6) 珍宝類 (8)
人物類 (61) 人事類 (91) 身体類 (14) 器用類 (45) 衣服類 (10)
飲食類 (20) 花木類 (9) 鳥獸類 (11) 数目類 (16) 通用類 (27)

倭船

倭好 (日本輸入品)

絲・絲綿・布・綿紬・錦繡・紅線・水銀・針・鉄鍊・鉄鍋・磁器・古文銭・

古名画・古名字・古書・葉材・氈毯・馬皆氈・粉・小倉羅・漆器・醋

寇術

倭刀 上等 次等

卷三 広東沿海総図 廉州府図 雷州府図 高州府図 広州府図 惠州府図 潮州府図

広東兵防官考 広東倭変紀 広東事宜

卷四 福建沿海総図 漳州府図 泉州府図 興化府図 福州府図 福寧州図

福建兵防官考 福建倭変紀 福建事宜

卷五 全浙沿海総図 温州府図 台州府図 寧波府図 紹興府図 杭州府図 嘉興府図

浙江兵防官考 浙江倭変紀 浙江事宜

卷六 直隸沿海総図 松江府図 蘇州府図 常州府図 鎮江府図 揚州府図 淮安府図

直隸兵防官考 直隸倭変紀 直隸事宜

卷七 山東沿海総図 登州府図 萊州府図 山東兵防官考 山東倭変紀 山東事宜

遼陽図 遼陽兵防官考 遼陽事宜

卷八 嘉靖以来倭奴入寇総編年表

惠潮・漳泉・興福・温台・寧紹・杭嘉・蘇松・常鎮・淮揚

卷九 大捷考

望海埭之捷(永樂17) 王江涇之捷(嘉靖34) 平望之捷(嘉靖34)

陸涇壩之捷(嘉靖34) 後梅之捷(嘉靖34) 清風嶺之捷(嘉靖34)

仙居之捷(嘉靖35) 乍浦之捷(嘉靖35) 紀剿徐海本末(嘉靖35)

龜山之捷(嘉靖35) 金塘之捷(嘉靖35) 擒獲王直(嘉靖36)

舟山之捷(嘉靖37) 淮揚之捷(嘉靖38) 寧台温之捷 平倭録

卷十 遇難徇節考

卷十一 經略一

叙寇原 除内逆 定廟謨 扱將材・御將附 実軍伍 選士卒 恤軍属

精教練 足兵餉 清屯種 汰冗食 慎募調・客兵附 集衆謀 収囤籍

定武略 鼓軍氣 公賞罰 禁妄殺 処首級 恤傷殘

卷十二 經略二

禦海洋 固海岸 勤会哨 謹瞭探 重隣援 散賊党 慎招撫 扱守令 拯民窮

嚴城守 築城堡 広団結 行保甲 降宣諭・用間諜附 通貢道 開互市

卷十三 經略三

兵船

広東船図説 尖尾船図説 大頭船図説 大福船図説 草撤船図説 海滄船図説

- 開浪船図説 高把梢船図説 鱧艦船図説 蒼山船図説 八漿船図説 鷹船図説
 漁船図説 網梭船図説 両頭船図説 蜈蚣船図説 沙船図説 船碇図説
 兵船総説 兵船稍手論
 兵器

- 粵兵盔甲図説 燕尾牌図説 挨牌図説 藤牌図説 銅発貢図説 仏狼機図説
 鳥銃図説 銃図説 子母炮図説 一窩蜂図説 天墜炮図説 地雷図説
 大蜂巢図説 火妖図説 火薬桶図説 火磚図説 噴筒図説 火器図説
 礮図説 両広葉箭図説 辺箭図説 弩箭図説 伏弩図説 馬箭図説
 火箭図説 神機箭図説 標鎗図説 長鎗図説 梨花鎗図説 猿筩図説
 棍図説 天蓬鎗図説 偃月刀図説 劔図説 喇叭図説 兵器

『籌海図編』十三巻は明鄭若曾撰、嘉靖四十一年（一五六二）成る。鄭若曾は蘇州府崑山県の人、嘉靖初貢生、初め魏校、ついで湛若水・王守仁を師とした。倭寇が最も猖獗を極めた嘉靖三十年代に倭寇鎮圧責任者胡宗憲の幕僚となつて活躍、本書刊行の前年嘉靖四十年に「日本図纂」（鄭若曾自著『鄭開陽雜著』所収）を作成して胡宗憲の認めるところとなり、彼の援助で籌海図編は出版された。そのために明末には本書の撰者を胡宗憲とするものが現れ、四庫全書提要に至り決定的となった。なお、鄭若曾には同じく海防、江南軍事問題を扱った『江南経略』八巻があり、四庫全書に収められている。

さて、『籌海図編』の内容項目から判る同書の特徴であるが、第一に図編の名のごとく輿地全図・広東・福建・浙江・（南）直隸・山東・遼東の沿海山沙図（巻一）、日本国図（巻二）、広東から遼東まで各省沿海総図と各省属府州図（巻三から巻七）、さらに各種兵船・兵器類等々が図絵によって示されている。第二の特徴は広東から遼東まで中国の沿岸海

岸線が全て検討されている。第三に倭寇について日本情報がその中国への朝貢の歴史から日本地理、風俗、日本語に至るまで詳細に調査されている。これは先掲の『全浙兵制考』に付す「日本風土記」と共に一六世紀中国の日本理解の程度を示して興味深い。いずれにしても、『籌海図編』は倭寇対策、辺防海防書のさきがけで最も内容が豊かな典型の類書と言え、次に挙げる諸書に与えた影響が大きい。

次に、『尊經閣文庫漢籍分類目録』史部 地理類一によつて同文庫所蔵の代表的海防書三種を検討する。

『兩浙海防類考』四卷 明謝廷傑撰 明万曆版 四冊 二〇九頁

万曆乙亥(三年)仲夏浙江布政司右参政前奉勅提督學校甌寧滕伯輪 序

万曆三年三月浙江等処提刑按察司巡視海道兼理辺儲整飭寧紹兵備副使劉 序

卷一 浙江輿図叙 兩浙輿図 全浙海図 浙海指掌図 倭夷寇道図

卷二 申明職掌 總參議設 各区戰船 水陸官兵 官軍兵船員名及防守地方哨道

申嚴哨探 衛所軍糧 官兵糧餉 戰船料稅

卷三 軍需犒賞 各府額餉 漁稅事宜 倉糧条議 審軍磚瓦

修理城垣 修理戰船 修造兵器

卷四 操練官兵 考察官捕 獲功賞格 報捷統考除經籌海図編記載者不開外

弁倭真偽 全浙總論 羊山防守 陳錢嚮導 普陀禁約

海山沿革 天漲塗田 風雨占候図附 潮汐占候図附

『籌海図編』の浙江の部分だけであるが、海防対策の内容はより具体的である。

『温処海防図略』二卷 明蔡逢時撰 明万曆版 二冊 二一〇頁

万曆丙申(二四年)上元浙江按察司整飭温処兵備兼分巡浙東道副使宛陵蔡逢時 序

卷一 温処地圖 温区海図 倭夷入寇海道図 倭島図 城池地里

沿海巡司 沿海台寨烽墩 沿海扼寨 水陸衝要 水陸兵制

水陸兵制附歲文 額徵 兵餉附外府協濟 軍儲府食糧則例 漁税

軍儒 清屯 造船附税例 器械附価数

卷二 選兵凡二 練兵凡二 期 瞭探 陣図設

武芸 衝鋒 夜宮 征行令 臨敵令

隨宮器械 城守事宜 入寇海道附變体 外海風潮里至 辯倭

賞格 賞額 賞罰 修城池 修郷堡

実軍佐 覈倉糧 集漁船 堤海岸 処州防砦四至説

失風軍火器械 戦船改税議 併宮議

これはさらに浙江の福建よりの地域温州処州の二府の海防対策書でさらに詳細が検討されている。

『海防纂要』一三卷 明王在晋撰 明万曆版 六冊 二〇六頁

万曆癸丑(四一年)孟冬欽差提督軍務巡撫浙江都察院右僉都御史前大理寺右少卿右寺丞奉勅閱視真定関宮巡視

京宮提督北直隸学政河南道監察御史高举 序

万曆癸丑孟秋賜同進士出身嘉議大夫浙江等処提刑按察司按察使前以倭功陞級奉勅提督湖広学政黎陽王在晋 撰

序

卷一 広東事宜

東路 中路 西路 海禁

福建事宜

題設寨遊 寨遊要害 海禁 福洋五寨会哨論 福寧州
条陳防海事宜議 整飭寨遊禦賊議 保護洋船議 福建備倭議
浙江事宜

論要害 論設備 論会哨 杭州 台州

海奥 議屯 土兵 陳錢嚮導 舟山

浙江要害論 嘉区防守事宜 広福浙兵船会哨論

卷二 南直事宜

江南諸郡 蘇松水陸守禦論 江北諸郡 江北設險方略論

江淮要害論 浙直福兵船会哨論

山東事宜

登州營 文登營 即墨營

北直隸事宜

遼東事宜

遼東軍餉論

太倉使往日本針路 以下係外国考程途針路

福建使往日本針路

附屬国紀略

朝鮮考 附八道

天朝至朝鮮東界地里

明代軍政・边防書の研究・序説

王京起由西路至南原府程途

王京起由東路至南原府程途

琉球考
琉球在泉州之東海島中

福州往大琉球針

回針

卷三 皇國一統設

華夷沿海經略序

日本考 附各部州郡考

前代朝貢考

本朝備倭通貢考

經略朝鮮

卷四 朝鮮復国日本封貢議

卷五 禦倭方略

防海七事

発汛四欸

屯局軍兵督捕三欸

營規四欸

船器墩台総哨四欸

団練軍民兵哨守議

防險三説

靖海島以絶罽端議

禁戢漁民搭廠繫筍議

防禦機宜五議

宣諭琉球議

卷六 防倭標本説

船器攻圍法

兵器説

火器説

戰船説

遊艇

蒙衝

樓船

走舸

鬪艦

海鵠

水戰

車戰

攻城法

銷盜

被圍

奇伏

卷七 經略事宜

定南謨

叙寇原

除内逆

捩將才

突軍伍

恤軍屬

精教練

足兵餉

清屯種

汰冗食

集衆謀

收凶籍

公賞罰

禁妄殺

禦海洋

固海岸

謹瞭探

慎招撫

散賊党

捩守令

周間謀

築城堡

通貢道

開互市

備水陸

練氣力

習銃砲

恤傷殘

調客兵

広団結

卷八

定武略

鼓軍氣

処首級

恤傷殘

調客兵

広団結

降宣諭

詰奸細

重隣援

別号色

寬勦除

恤陣亡

広招賞

先整備

倡勇敢

議徵集

行保甲

弁真偽

卷九 大捷考

撫歸降 慎征討 嚴哨探 設城舖 謹更寐 密搜邏
期共濟 嚴伏路 審寇術 弁船器 禁通番

望海塢之捷 王江涇之捷 平望之捷 陸涇壩之捷 橫涇之捷

後梅之捷 清風嶺之捷 仙居之捷 乍浦之捷 勦徐海

龔山之捷 擒王直 舟山之捷 淮陽之捷

卷十 長白港之捷 霏衢之攻 裘村朱家店戴奧湖陳之捷 劍山海洋之捷 南游綠鷹之捷

五江湖之捷 南甯竹嶼東洛三礁之捷 大衢奧之捷 鹿頭外洋之捷 南甯東洛外洋之捷

浪岡陳錢海洋之捷 漁山海洋之捷 馬跡等山八捷積谷等山五戰 馬跡羊山漁船二捷 徐公海洋之捷

漁洋之捷 韭山浪岡漁山三捷 金齒外洋之捷 積穀海洋之捷 東霍外洋之捷

西磯洋岐六嶼海洋之捷 東洛海洋之捷 橫坎 門外洋之捷 花腦浪岡之捷

洛伽外洋之捷 東霍之戰 東洛外洋之捷 漳泉之捷

附獲夷紀略

交趾夷 朝鮮漁人 飄倭

行軍法令

軍行 安營 起營安營規度 禁誼 度險 出隘 齋糧 斥埃聽望

探旗 探馬 通舖 行烽

卷十一 約法 營規 墩墩号令 伏路軍法 治水兵法 行營軍令 城守号令

卷十二 功令

功次通例 倭賊功 中傷功 倭賊領軍功 軍職獲功贖罪

旗舍民兵人等獲功贖罪 陣亡功 優恤成規

禁下海通番律例

私出外境及違禁下海 輯祭禱說 考察 出軍誓衆文 軍祭

醫藥類 疫氣諸病捷說 治法 兵瘴 折傷金瘡說

破傷風論 行軍烟火所傷 冬月手足皸裂 救五絕死

卷十三 選日門

逐月吉日定局 逐月直日凶神總局 行船類 河伯風波日 出兵類

歲月吉凶 五將所在 玄女大敗日不可用 白虎頭日出軍敵人自伏

四離日不宜出軍 用兵須看天兵所在不宜出軍 八龍七鳥九虎六蛇日不宜出軍

戰雄方 戰雌方 五帝所在日不宜向之出軍向之必敗 四耗日不可攻戰

四窮日不宜出軍 天敗日不宜攻戰 四墓日不宜出軍 章光日不宜出軍

占驗門

出軍占候 安營選地 安營卜地 占軍災祥 營地

風雨占候 舟師占驗 定各色惡風 逐月風忌 占風

占天 占雲 占日 論太白昼見 論三星搖動

占氣 占日月 占雷霆 占雨 占虹

占星 占流星 占北斗 占星雜見吉凶 占虹蜺

占霧 占電 占海 行船占日月星雲風濤 占鳥獸

占潮 浙東潮候 定太陽出沒以応潮信時刻長短 定寅時

対象としている中国沿海部は『籌海図編』同様に南は広東から北は山東遼東に及ぶ。しかし、『籌海図編』が倭寇日本のみを防衛対象と意識し、日本情報の収集に意を用いたのに対し、『海防纂要』は朝鮮や琉球国をも取り上げている(巻二)。ただし、経略や戦闘記録はやはり倭寇関係である。それでも、倭寇記録すなわち「大捷考」は『籌海図編』の記事とに違いが認められる。時代的には万曆期に降る。その具体的指摘は後考に譲る。

小 結

明清期に固有な漢籍のみに史部政書・軍政、史部地理・辺防に分類される一群がある。近世江戸時代に日本に将来されたが、どこに所蔵されたか、いかに伝承されたかは興味ある課題を提供しよう。もとより本稿は完成していない。中間報告である。紙数の関係から史部地理外記に属す書物の検討は別考とする。これにより『籌海図編』の日本情報や『全浙兵制考・日本風土記』の内容の位置や意義が確定すると思われる。

なお、本稿は重要研究「沖繩の歴史情報研究」「環東シナ海地域間交流」のデータベース作成課程の産物である。

〔註〕

① 戦前期以来の多くの研究蓄積があるが、最近の研究では日本史に田中健夫『中世対外関係史』1975年・東京大学出版会、東洋史に佐久間重男『日明関係史の研究』1993年・吉川弘文館がそれぞれ代表的研究といえる。史料集に湯谷稔編『日明勘合貿易 史料』1983年・国書刊行会、鄭木梁生編校『明代倭寇史料(一)(二)』1987年・文史哲出版社、台湾台北がある。

② 田中健夫「籌海図編の成立」『日本歴史』57号、1953年。

③ 川勝守「明清時代、史部地理類・外紀書と環シナ海地域間交流」『九州大学東洋史論集』二十四号、一九九六年、一月。